

中北.com

地域教育情報紙

山梨県教育委員会
中北教育事務所
地域教育支援スタッフ



チュウホクドットコム

編集・発行 中北教育事務所 地域教育支援
担当：深澤 隆二・雨宮 靖子

〒407-0024 韮崎市本町4-2-4
電話 0551-23-3046
FAX 0551-23-3013

中北の地域社会 (community) の心の交流 (communication) をめざします

地域総がかりで子どもの育成を ～中北地区地域教育フォーラム～

10月24日(木)、甲斐市双葉ふれあい文化館において、令和元年度中北地区地域教育フォーラムが開催されました。この地域教育フォーラムは、県や各市町の行政、学校、PTA、青少年育成団体などの教育関係者および民間諸団体が、講演会等への参加を通じて現代的な教育課題に対する知見を深め、一体となって教育活動に取り組む意識を高めることや、それぞれの考え方や活動の内容をお互いに理解・共有しながら連携を深めることで、地域ぐるみで家庭・地域の教育力の充実に結びつけ、子どもたちの健全な育成を推進していくことを目的とする中北地区地域教育推進連携協議会の活動の一環として行われたものです。



太田充 会長

令和となって初めて行われた今回の地域教育フォーラムには、山梨県教育庁社会教育課からお迎えした来賓の3名を含め、幼稚園や保育園、また小中高等学校などの学校関係者や保健福祉・ボランティア関係者、各地域の社会教育委員など、200名を超える方々が参加し、地域が総がかりとなって、個性豊かで、心身の調和のとれた子ども達を育てる環境づくりへの関心の高さがうかがえました。また地域教育フォーラムの開催にあたり、主催者を代表して、中北地区地域教育推進連絡協議会会長である太田充昭和町教育委員会教育長が、「学校の特色や地域の実情に合わせて、地域の人・もの・こと、といった資源を最大限に活用し、子どもの成長のために地域とつながるコミュニティ・スクールが山梨県で初めて生まれたのが、この双葉の地。その双葉で、家庭・学

校・行政・地域が一体となって、子どもの育成について考える地域教育フォーラムが行われることに縁を感じる。このフォーラムが有意義なものになることを祈念する」とご挨拶を述べられました。



子どもの心を育てるコミュニケーション

～令和元年度 中北地区 地域教育フォーラム～

山梨大学大学院 総合研究部 教育学域 教育学系 教授 栗田 真司 氏

令和元年度 中北地区地域教育フォーラムでご講演いただいたのは、山梨大学大学院 総合研究部 教育学域 教育学系教授の栗田真司先生です。先生は岐阜県のご出身で、茨城で保育士をご経験後、筑波大学教員、放送大学客員教授を経て、現在山梨大学の教授、また臨床心理カウンセラーとして、生涯学習論、コミュニケーション心理学を中心に研究なさっていらっしゃいます。YBS放送の「子育て日記」のMC、山梨日日新聞の「くりた先生のコミュニケーション講座 およこみゆ」などで、栗田先生をご覧になった方も多いのではないでしょうか。今回の講演では「子どもの心を育てるコミュニケーション」と題し、子ども達との接し方、また子ども理解を深めるポイントについてお話しいただきました。以下はその要旨です。



基本的な姿勢—今日から意識すること

相手を認める

コミュニケーションとは鏡である。すなわち相手の様子がこちらにわかるように、こちらの様子も相手に伝わる。「人間関係を良くしたい」と思うなら、責任の半分はこちらにあるということを意識する必要がある。とにかく相手を認めることが大事。「ほめる」より「認める」。特別な時にほめるのではなく、何も能力を發揮していないような日常生活の中で、「生まれてきてくれてありがとう」「大好きだよ」といったことをたくさん伝えていくと、子どもは存在自体を認められたと思い、挫折しにくくなる。

一人の人間として尊重し、異年齢の集団への参加を促す

人は、例えば山梨県人だとか、男性とか女性とか、さまざまな属性を持っている。そしてそれによって周りから判断されることがある。しかし、「一人ひとり、すべての人は違う」と考えることが大事である。そして「命令」とか「上から目線」をやめる。横からの目線で声をかける。テレビでも見ながら、横に並んで話すと良い。自分の悩みを話すことで、子どもも話せるようになっていく。また今の日本は地域の教育力、とくに社会教育が弱い。異年齢集団との交流も非常に少なくなっている。同世代の人と長い時間一緒にいると競争意識が高くなり、挫折感が生まれる。しかし異年齢の人と接することで助け合いが生まれてくる。子どもを優しく思いやりのある子に育てるためには、異年齢の集団に入れてあげることが必要である。

基本的な方法—今日から実践すること

言葉掛け

まずは「私」メッセージ。「早くしなさい」ではなく、「私はこの後、こういう用事があるから早くしてくれると助かる」と「私」という主語と「理由」、「気持ち」を入れて話すようにすると良い。また比較するときは個人内で。大人は誰かと比較される評価に慣れてしまっていて、すぐに比較してしまうが、それは変えなければいけない。以前と比べてできるようになったこと、改善されたことを伝えてあげると良い。そして失敗したときこそ、認めてあげることが大事。頑張ってきた過程を認めてあげること、子どもは味方ができたことを感じ、安心することができる。「頑張れ」ではなく、「頑張ってるね」あるいは「頑張ったね」。

聞き方、話し方

うなずきながら、話を聞こう。人はうなずきながら怒ることはできないから。誰かが話し始めたらうなずきながら聞いてあげること、相手に気持ちが伝わる。また話す時は相手の話し方に合わせて、こちらの話し方を変えることで、相手に「あなたの気持ちを理解していますよ」ということが伝わる。

講演終了後には「これからの生活の中で相手を認める言葉掛けをしていきたい」や「早速実践してみます」といった感想が多く寄せられ、参加者それぞれの心に響く講演会となった様子がうかがえました。

災害に備え、地域とPowerful連携

～山梨県立白根高校～

9月19日（木）、県立白根高校において、地域住民と合同の総合的な防災避難訓練が行われました。事前の危機管理が、災害発生時あるいは発生後のすべての危機管理に影響することから、日頃から校内で学校防災計画を整備し、災害時の対応について、避難訓練等で繰り返し生徒に指導しているという同校。今回は、大規模な自然災害の発生が相次いでいること、また同校が南アルプス市の指定避難場所となっていることから、学校が所在する今諏訪地区、桃が丘地区の自治会、地区防災組織に呼びかけ、生徒と地域住民と一緒に防災訓練を行いました。この日集まった地域住民は約40名、高校生と防災訓練をするのは初めてと言い、市消防本部と八田消防署の指導で、起震車体験、消火訓練などに取り組みました。合同訓練開始時には、お互い硬さも見られた地域住民と高校生ですが、防災テントである「プライベート・ルーム」を一緒に組み立てるなどの交流を通じて徐々に打ち解け、防災用非常食であるアルファ米の試食の際には高校生が地域住民をリード、地域住民の笑顔がこぼれる場面も見られました。災害の発生時には、自分の身を守るとともに、被災後の避難所での積極的なボランティア活動等も期待される高校生。地域の支援者として、地域の安全に貢献し行動する力を養う高校生と、地域の歴史や地形・防災環境等に詳しい地域住民との間に、強い連携が生まれた合同訓練となりました。



地球規模の課題に挑戦

～山梨県立甲府第一高校～



2019年現在、世界には気候変動による温暖化や海洋の汚染、紛争や対立、人口爆発や食糧不足など深刻な課題が山積しています。一方日本では急激に進む人口の高齢化や減少から、将来の経済成長に対する懸念も広がっています。こうした問題にどのように向き合い、どう取り組んでいけばいいのか、また人工知能（AI）のような科学技術の進歩は今後の社会にどのような影響を与えるのか。2035年の未来に自分が就いているであろう職業の視点から、高校生がこうした社会課題の解決への道を探る「一探未来フォーラム」が、9月28日（土）に県立甲府第一高校で行われました。参加したのは同校探

究科の1年生と2年生の150人。生徒達はエンジニアや弁護士、アーティストといった職業をそれぞれ事前を選択、その専門的な視点から課題を見つけてリサーチを進め、自分の考えを深めたり、周りと意見を交換したりしながら、探究活動を行ってきたと言います。自分の興味・関心に応じて十分に行われた探究活動に裏打ちされた知識や理解をもとに、フォーラムでは設定されたテーマに対して、生徒達から次々と意見が発表されました。ファシリテーターも同校の生徒が務め、大学教員、起業家、企業経営者、町長といった経験豊かなコメンテーターに、より深い、専門的な知見を求めていく場面も。地球規模の課題を「自分事」として捉え、真剣に行動していく高校生の頼もしい姿が印象的なフォーラムとなりました。



地域住民の学びの場として～社会教育施設の活用～

各地域の公民館や図書館、生涯学習センターなどの社会教育施設では、地域住民が持つ様々な学習ニーズに合わせた多様な学習の機会が提供され、地域の幅広い学習活動を支える重要な存在となっています。そのため各市や町の生涯学習担当者は、多様な経験や技能を持つ人材を発掘・活用し、地域住民のための学びのきっかけ作りを行っています。また今後は学校がこうした外部人材の協力を得ることで、これまでにない教育成果が生み出されることも期待されています。そこで今回は、そうした社会教育施設のうち、南アルプス市生涯学習センターと甲府市北公民館における講座を紹介します。

「はじめてのチョークアート」

南アルプス市生涯学習センター

生涯学習講座「はじめてのチョークアート」が南アルプス市白根生涯学習センターで開催されました。新しいアートとして人気のあるチョークアート、山梨ではまだあまり見かけませんが、都内では店内装飾として多くのカフェで使われています。ところでチョークアートに使われている黑板やチョークは、学校の黑板やチョークとは違うものだというをご存じですか。実はチョークアートに使われているのはMDFという合板に特殊な塗料を塗った黑板と、オイルが入りクレヨンのような使い心地のチョークな

のです。今回指導してくださったのは甲斐市在住Merry Chalk ArtのKAORI先生。KAORI先生はたまたま見かけた雑誌に掲載されたチョークアートに魅了され、チョークアート発祥の地と言われるオーストラリアのゴールドコーストで勉強され、インストラクターの資格をお取りになったといいます。一方受講生の皆さんは、「前から挑戦してみたかった」とこの講座を大変楽しみにしていた様子。先生の丁寧な指導と受講生の皆さんの熱意で、講座終了時にはすばらしい作品が仕上がり、大満足な講座となりました。



「津軽三味線初心者入門講座」

甲府北公民館

一方、甲府北公民館では「津軽三味線初心者入門講座（全3回）」が行われました。講師は、甲府市に指導教室を持つ藤田淳三寿さん。学生のころはギターを弾き、ロックバンドで活動されていたこともあるといいます。ある時、現在の師匠である藤田淳三氏の演奏を聴き、津軽三味線の音色の持つ豪快さと繊細さに心を奪われ、藤田三絃会に入門、7年の修行を経て藤田流名取の免状を受け、現在は山梨県内外で自主演奏活動を行うとともに、伝統音楽の素晴らしさを伝えようとさまざまな場所で指導にあたっておられます。4年前からは、甲府市千塚地区文化協会では津軽三味線の指導を行っていることが縁となり、甲府北公民館で初心者のための講座を開催しています。学校の音楽の授業で三味線や琴などの伝統音楽が扱われる機会が増えたことや、来年行われる東京オリンピックに向け、日本古来の文化への注目が集まるなか、三味線や琴などの楽器に実際に触れてみた

という人が増えており、今回の講座にも、バイオリンなど弦楽器の演奏経験がある方などが、気軽に津軽三味線を体験できる機会として参加されました。上手に撥（ばち）を使えるようになるまで3年、と言われる津軽三味線の演奏ですが、入門講座では丁寧な指導を受け、最後は先生が作曲した津軽じょんがら節を全員で合奏。津軽三味線の持つ迫力を大いに楽しむことができた講座となりました。

